1966.2.5 新報

南洋墓参 ついに実現

五人一組、何度でも サイパン（非戦略地）など九島

弁務官許可

沖縄外地引揚者協会と沖縄遺族連合会が、五年前から日本政府と米軍にたいして、実現方を訴えてきた旧南洋群島地域への慰霊墓参が、ワッソン高等弁務官とサイパン島在南洋群島米高等弁務官との交渉で、条件付きで慰霊墓参が許可になったと、四日あさのワーナー民政官と松岡主席との会見で明らかにされた。これにより、行政府と同協会では「これまで不可能とみられていた南洋群島墓参の道は開けた」として、条件の緩和、墓参時期と細則など具体的な問題について、さらに米側と折衝することになった。また、本土政府にたいしては、遺族団派遣費用の補助や墓参船の派遣について要請する考えである。



サイパン島の雑木の中には沖縄出身戦没者たちの遺骨がいまなお野ざらしのまま……（昨年8月、岡田本社記者写す）

ワーナー民政官と松岡主席の会見が、同日午前九時すぎから米民政府会議室で行なわれ、席上、ワーナー民政官は、このほど、サイパン島の南洋群島地域在米高等弁務官から、ワッソン高等弁務官あてに届いた書簡の内容を伝えた。松岡主席は、昨年来、ワッソン高等弁務官にたいして、サイパン島、テニアン島など旧南洋群島地域への慰霊墓参の実現方を要請しており、ワッソン高等弁務官は、サイパン島在の米高等弁務官との間で書簡の交換を行ない、遺族団の入域許可について交渉していた。

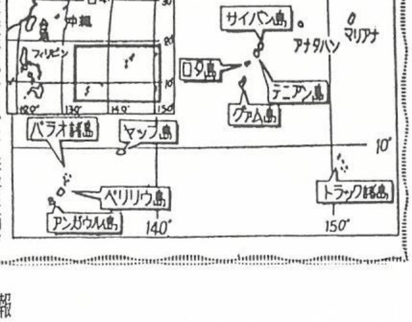
その回答が、このほどワッソン高等弁務官のもとに届いたもので、それによると①慰霊墓参は一回に五人一組とすること②政府派遣の形式ではなく、民間団体の組織によるコマーシャル・ベースであること③五人一組とする。墓参の回数には制限は加えない④墓参はサイパン、テニアン、パラオ、ロタ、ペリリュウ、アンガウル、トラック、ヤップ、グアムなどの島に限定し、米軍の戦略基地のある島は除く—などの条件を付して慰霊墓参を認めるというもの。

一回の墓参りにつき五人一組という人員の制限について、書簡では、これら南洋群島では一度に多くの遺族団を宿泊させるような宿泊施設がないことが理由としてあげられているという。このため、米民政府では、慰霊墓参の派遣について、こんごさらに、サイパン島在の米高等弁務官と交渉を持ち、具体的な打ち合わせを行なう考えである。

松岡主席は、民政官との会見のあと、さっそく、大嶺真三沖縄外地引揚者協会副会長を行政府に招き、南洋群島慰霊墓参の〃実現〃を伝え、今後の問題について協議した。その結果、同協会の遺族団派遣計画では、五十六人が五十日間、各島をまわって慰霊墓参し、各島に「慰霊塔」を建立する計画であることから「一回につき五人一組では調査程度のことしかできず、慰霊墓参の実を上げることはできないとしている。しかし人員の制限が政治的な問題からではなく、宿泊施設の不備が原因であるところから、行政府と同協会では、船中泊ができるよう、大型船の派遣を本土政府に要請する方針である。

戦前、旧南洋群島地域には、約六万人の沖縄県出身者がおり、そのうち、今次大戦では一万人余の軍人、軍属、民間人が戦死した。沖縄外地引揚者協会と沖縄遺族連合会では、これら南洋に眠る同胞の霊を慰めることを企画し、一九六一年から、慰霊墓参の実現方を日米琉三政府に要請する一方、昨年八月、佐藤首相の来沖の際にも陳情した。これにより、本土政府でも米側要路と交渉しているおり、またさきごろ、来沖した山野特連局長も、この件にかんして、近く米太平洋軍司令部に打診する考えであることを明らかにした矢先だった。

これまで、本土政府とこの問題について折衝してきた大嶺副会長の話では、総理府では、「まず、南洋群島の入域許可を取ることが先決」としており、派遣費用の補助、派遣船のチャーターについては、場合によっては〃宗谷〃を出してもよい—とかなり弁力的な態度だという。



大きな喜び

人員制限さらに政治折衝

松岡主席の話 これまで困難だとみられていた南洋墓参の実現の糸口が開いたことは大きな喜びである。条件付きの許可なので、これは今後さらに、政治折衝をしてみるつもりだ。できれば、協会の計画どおりの線で墓参が実現するよう努力する。

大嶺真三外地引揚者協会副会長の話 五年前から訴え続けてきたことが、ワッソン高等弁務官の尽力で実現できることは、これ以上の喜びはない。本来なら、南洋群島への慰霊墓参はもっと以前に実施されるべきものであった。しかし、条件の中にある一回に五人一組というのは満足できない。私たちの計画では、八つの島をまわって各島に一つずつ慰霊塔を建立する予定だし、五人ではどうにもならない。われわれの計画どおり実現するよう今後さらに、日米両政府と折衝する。宿泊の関係で人員が制限されるのなら〃宗谷〃クラスの大型船を本土政府に派遣要請する考えだ。以前総理府では実現の糸口が開けば船を出してもいいようなことをいっていたので見通しは明るい。

1966年（昭和41年）2月5日琉球新報

〝英霊も浮かばれぬ〟

親族がなく放置される屋敷も

69.6.2 新報

忘れられた〝全滅家族〟

沖縄戦が終結してから二十四回目の「六月二十三日」がやってくる。だが戦争の傷はまだまだいえない。遺骨さえ捜せない人も多い。なかには、一家が全員死亡したため、親類からも忘れられようとしている墓もある。〝一家全滅〟者の霊をとむらう「しづたまの碑」が、このほど、戦後二十四年にしてできたが、親族関係者は「全滅家族は、親族からも忘れられてしまうかも知れない」と慰霊の日を前に、心を痛めている。沖縄戦最後の戦場となった糸満の摩文仁一帯には、一家全員が死亡したため、その屋敷がいまでもそのまま打ち捨てられているところがいくつかある。死亡者の関係者が、本土にいってしまったり、移民で南米などへ行っているからだ。遺骨も見つからない例がほとんどで、死亡者の霊も、遺族がなく、供養されないのが多いという。

沖縄遺族連合会の調べによると一のは、全島で八百三十世帯約千五一一葉もされない一家全滅の霊を一カ一まの碑」を建立した。「やっと肩沖縄戦で一家全部がなくなった一百人。遺族連合会では、これら供一所にまとめて、このほど「しづた一の荷が降りた。心がとがめていた



お痛ましい〝屋敷〟の姿
な跡＝糸満町摩文仁で

が、なにしろ調べるだけでも大へんだ。遺族がいないからなみだいていではない」と、遺族会ではホッとしている。

だが、一家が全員なくなった家族の霊をとむらっている親類の人や遠縁の人たちは、それでもなお、気持ちは晴れない。本家の九人家族全員と、姉二人のとつぎ先の二家族全員をなくした西原村の与那嶺安正さんは「遺骨はみんな見つかっていません。死んだ場所を聞いては幾度も摩文仁にあたりへ出かけたがダメでした。私は死んだ人たちの顔をみんな覚えているが、もう私の子どもたちは知りません。写真も一枚もないし。本家の墓も、子供の代から忘れられてしまうのではないか」と心を痛めている。また、糸満町米須の徳元清栄さんも、おじ一家を戦争でなくしたが「おじの写真があるからいいが、子どもたちは、だれも知りませんヨ」と、神だなに飾ってある黄色にやけた写真を見せてくれた。そして「私たちのように霊をまつる親類がいる場合はいいが、そうでない人たちは、ほんとにかわいそうです。ほんとに、戦争を再び起こさないように、みんなこの恐ろしさを忘れないで考えてください」としんみり語っていた。

1969年（昭和44年）6月2日琉球新報

「二度と悲劇は繰り返すまい…」

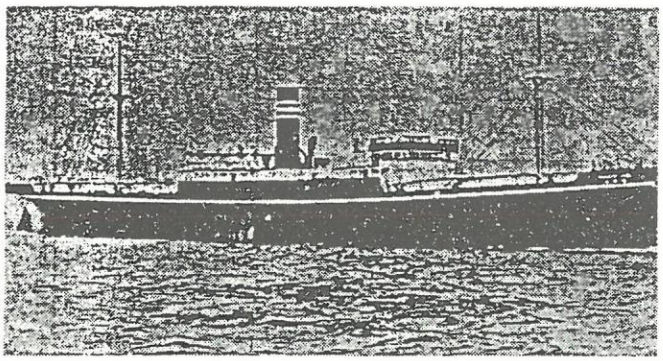
しめやかに対馬丸遭難死没者海上慰霊祭

涙声が海面に響く

「お母さんだよ、わかるかい」

いたたまれず甲板に座り込む遺族

8-23 新聞 (12)



昭和19年8月悪石島沖で魚雷を受けて沈没した対馬丸

【那覇で金城記者記者】遺族らを乗せた疎開船「対馬丸」は二十二日午後十時、真っ暗な悪石島付近の海に停留した。そこは三十一年前の昭和十九年八月二十二日午後十時十二分、米軍潜水艦の魚雷三発が学童疎開船・対馬丸に命中、あっという間に学童や引率の教師ら千四百八十四人の命を奪った魔の海だ。年老いた遺族らは船べりにしがみつき、ライトで照らされた海をくい入るように見る。思わず夫や息子、娘の名を呼ぶ遺族ら。との願にもあふれる涙が、そして すすり泣きが、しかし叫べども大勢の命を奪った海からは応答はない。船上では遺族や関係者らで遭難死没者海上慰霊祭がしめやかに行われた。

台風6号が本土に去った二十二日午後十時、学童疎開船対馬丸の死没者の遺族五十五人と関係者七十九人を乗せた海上保安庁巡視船「宗谷」(三、八六九トン)が悪石島付近に着いた。北緯二九度三三分、東経一二九度二〇分。七島灘と呼ばれる魔の難所で対馬丸は撃沈された。魚雷命中から沈没までわずか十一分間。千七百六十一人中、学童七百三十六人、引率教師、世話人二十四人、付き添い七百二十四人計千四百八十四人が海らぬ人となった。

あれから三十一年、遺族らの強い願いがようやくかなって、この日の海上慰霊祭の実現となった。遺族の中で最年少が照屋信さん(台風6号が本土に去った二十二日午後十時、学童疎開船対馬丸の死没者の遺族五十五人と関係者七十九人を乗せた海上保安庁巡視船「宗谷」(三、八六九トン)が悪石島付近に着いた。北緯二九度三三分、東経一二九度二〇分。七島灘と呼ばれる魔の難所で対馬丸は撃沈された。魚雷命中から沈没までわずか十一分間。千七百六十一人中、学童七百三十六人、引率教師、世話人二十四人、付き添い七百二十四人計千四百八十四人が海らぬ人となった。

あれから三十一年、遺族らの強い願いがようやくかなって、この日の海上慰霊祭の実現となった。遺族の中で最年少が照屋信さん(最高年齢は具志川智禎、宮城三郎、宮城マノ(いずれも七十七歳)の三氏。息子や娘をとくした人たちだ。

遺難現場に着くと宗谷は汽笛を長く鳴らし、海上を照明した。特に甲板に座り込む遺族や、乗組員らに支えられる遺族もいた。

対馬丸が沈没した午後十時十二分から一分間の黙とう。そして申し合わせたように、遺族らは甲板に出て亡き兄弟、子供を乗った海を見る。沖縄から持参した沖

葉子や花束が、遺族らの手で海に投げ込まれる。「辛かったろうに…」「ようやくやって来たヨ」「お母さんだよ、わかるかい」涙で声にならない声が甲板のいたる所で叫ばれた。いたたまれなくて甲板に座り込む遺族や、乗組員らに支えられる遺族もいた。

対馬丸が沈没した午後十時十二分から一分間の黙とう。そして甲板上で海上慰霊祭が挙行された。遺族を代表して対馬丸遭難者遺族会の新里清寿会長(六〇)が「命短かく育ちに花と散りつつ過ぎゆけり年はめぐれど帰りこぬ 幼き顔の目には見ゆ」と弔歌をささげた後、「きょうこの三十一年間の思いをこめて、ある限りの海を出しつくし、波間に岸かぶ懐かしい顔、顔をしっかりとマブタに刻み込みます。わたしたちは英霊が船出した航路からみなさまの船路の即をここまでやってきました…」と弔辞を読みあげると、あちこちからすすり泣きが聞かれた。

続いて福木沖縄開発庁長官が「対馬丸遭難の出来事は忘れようとしても忘れることの出来ない悲しみである。私どもはあのような歴史を繰り返さないことを固くお誓いする」そして屋良知事が「皆さまを失った父母さまの嘆きや悲しみは一刻も絶えたことはなくわれわれもあの惨劇を一日も忘れたことはありません。二度とあのような悲劇をくり返さないことがみ霊のこめい福を祈る真上自慢です。遺族の接護やみ霊の処遇について前進するよう出来るだけの努力をします…」と弔辞を読みあげた。

この後、続いて甲板上で皇太子同妃両殿下からの献花にはじまり遺族や関係者もそれぞれ献花を行い、午後十時四十分、宗谷は汽笛を鳴らしながら遭難現場を離れた。遺族らは宗谷が現場を遠く離れてもいつまでも甲板から立ち去らなかった。

1975年(昭和50年)8月23日琉球新報

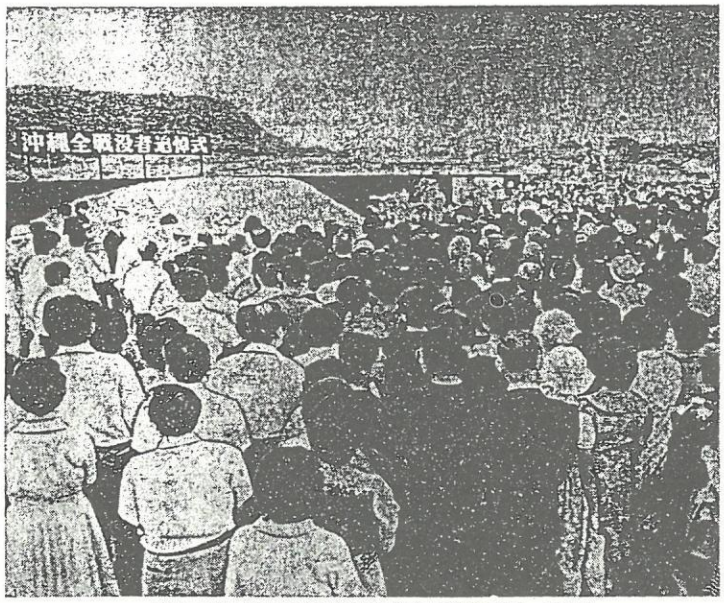
知事 世界へ"平和宣言"

沖縄戦没者33回忌「慰霊の日」

摩文仁で追悼式

6.24 朝刊 (21)

六月二十三日は二十万余の尊い人命を失い、第二の文化遺産、財産などすべてを焼きつくした沖縄戦の終結した日である。第二次大戦終えんの地、糸満市摩文仁の平和祈念公園では、県主催の「沖縄全戦没者追悼式」が行われた。式典には県内、外に住む遺族三百二十八人をはじめ、屋良沖縄諸島担当長官ら政府関係者、二十二都道府県、議会議長、一般参列者約五千人が出席、午前十一時五十五分、沖縄中央郵便局の職員四「レクイエム」の合唱で始まり、正午には黙とうをささげ戦没者のめい福を祈った。ことしは戦没者の三十三回忌にあたるため、平良知事が沖縄から全世界に向けて、「人類最大の敵である二度の戦争を否定し、世界の恒久平和を訴える"平和宣言"を行った。この日、晴天、八重山など沖縄各地で、「慰霊の日」にちなんだ行事がしめやかに行われた。(平和宣言全文19、11面に関連記事)



糸満市摩文仁の平和祈念公園で行われた「沖縄全戦没者追悼式」＝23日午前



平良知事「平和宣言」を読み上げる

平良知事は式辞の中で、「沖縄戦は戦争のもつ残酷さとむなしさ不条理のすべてが凝縮された、生き残った私たちに対し、二度と過ちを繰り返すことのないよう、また、戦没者の心をこころとして、その遺志を受け継ぎ、恒久平和の確立に努めるよう強く訴えている。

金城知信県遺族会会長は「十年一昔というが、沖縄戦も遠い日の出来事になった。だが、血をすった大地にとっては昨日のことのように思われる。祖国は戦後の荒廃の中から立ち上がり、国際社会の中からも立ち上がり、国際社会からの尊敬を受けるまでに発展した。これも戦争の反省からだ。平和発展に力をつくしてきた先輩たちの偉業に感謝し、遺族として世界平和の礎となるよう努力をつくしていくこと」と語った。

知花英二郎戦没者遺族代表は「沖縄県遺族連合会長、全国知事会日本遺族会会長、全国知事会（沖縄全戦没者追悼式典実行委員会）の副会長、屋良朝苗沖縄県知事、県議会議長、県出身国会議員、一般参列者、小、中、高生、各界代表の献花に移り、屋良知事が力強く全人類に平和の尊さを訴え、郷土をして世界平和のメッカたらしめんことを高らかに宣言した。

前、沖縄は原爆の祖国復帰を迎えることができた。しかし、平和憲法下に復帰して現在、いまなお広大な基地が存在し、県民生活に多大な影響を与えている。戦争を否定し世界の恒久平和確立のため最大の努力をすることが、われわれに課せられた唯一最高の責務であり、それこそ戦いの遺産である」と強調した。

内閣総理大臣の沼通のことばを代読した屋良沖縄開発庁長官は「沖縄県民は悲惨な戦争を体験、戦後二十七年間、本土と切り離され、厳しい試練を乗り越えてきた。政府は沖縄の心をこころとしてその施策を行うことを誓う。また、恒久平和の確立のために、二十万余の霊に報いるためにも、戦争の惨禍を再び繰り返さないよう、万国民の協力を強く要請する」と述べた。

平和宣言

かつて数々の祖先が平和を愛好の民として、育んだ琉球文化と、異質な現代文化との交流を図り、常に進取の気性をもって発展を期し、孔子出でて仁を説き、二〇〇〇年の昔キリストが出て博愛を説いた。

しかるに物欲に執着し国々の指導者たちは、覇権が敏争を繰り返えし、遂に二度にして幾万人の人々を戦禍後直ぬのため、生ける屍にした悲惨無残の歴史を使用して、第二次世界大戦を終えさせ、人類史上に、その上、我々の宝物の体験からとはばかり出た血の叫びであり、県民生命を守り、基地のない島にしようとの願いである。

我々の愛する郷土沖縄は、この第二次世界大戦末期の敵戦地となり、文字通り焦土と化し、多くの尊い生命を失ったばかりか、県民に計り知れない物心両面の犠牲を強いた。

ここに我々は、第二次世界大戦において戦没された全ての霊に対し、謹んで哀悼の意を表するとともに、生き残った我々は、これら戦没者の遺志を継ぎ、恒久平和の確立に努めるよう決意を新たにするものである。

十三年目の追悼式をおごそかに執り行うに当たり、二十二都道府県の遺族と多数の参加者に対し、あらためて、「慰霊の日」を沖縄の県民の休日とする条例を制定するよう要請する。

昭和五十二年六月二十三日

沖縄県知事　平良幸市

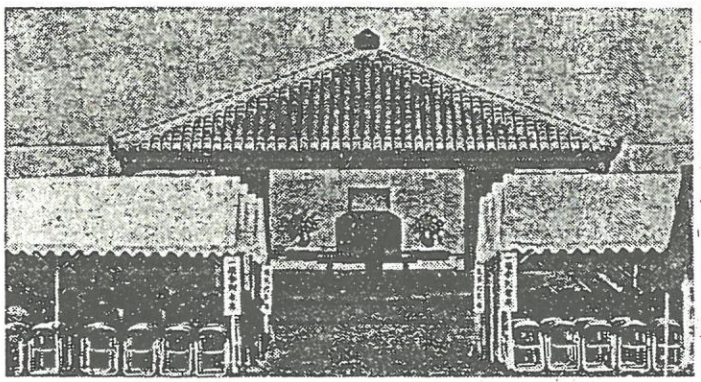
無名戦没者の霊を慰める

摩文仁で「墓苑」の竣工・追悼式

十七万柱を合祀

遺族ら三百人余が参列

「み霊よ安らかにお眠り下さい。私たちはあなた方の遺族である事を誇りに思い、自由と平和を守るために強く生きていきます」。雨にけぶる摩文仁の丘に、無名戦没者に対する追悼の辞が次々と流れた――。沖縄戦で亡くなった無名戦没者をまつる「沖縄戦没者墓苑」の竣工・追悼式が、二十五日午前十一時から糸満摩文仁の同墓苑で執り行われた。沖縄在住の遺族百八十四人や本土からの遺族八十人など計三百十四人が参列、中央納骨所（那覇市識名）から移された十七万柱を静かになぐさめた。



沖縄戦没者墓苑の竣工・追悼式が厳粛に執り行われた（糸満市摩文仁）

式は県警音楽隊の演奏する厳かな曲の中で始められた。最初に福本厚生大臣が、「最愛の肉親を失われ、戦後幾多の苦難をのり越えて来たご遺族に言葉もない。中央納骨堂に納めていた遺骨をもこの地に永遠にまつられることになった。先の大戦が終結して三十三年。戦争を知らない世代にも戦争の悲惨さを伝えていくだろう」と式辞を述べた。

続いて厚生省の河野遺族援護局長が、着工から竣工までの経過を報告した。

墓苑の除幕は小禄中学校二年の宜寿次聖香さんと美原中学校一年の仲宗根あゆみさん。二人とも沖縄戦で祖父を亡くした戦後世代。参列者に一礼したあと徐々に海をめくっていく。その手は静かでしかも力強い。

橋本厚生大臣が献花したあと、参列者が黙とう。内閣総理大臣代理の坂元親男沖縄開発庁政務次官、西銘知事、遺族代表と追悼の辞が続いた。

西銘知事は、「思えばここ沖縄は去る大戦でわが国唯一の戦場となり二十万余の生命が失われた。尊い生命を捧げられ県民の多くにとって永遠に忘れられない。み霊と沖縄戦終えんの地ここ摩文仁で安らかに眠り、とこしえに恒久平和と世界の繁栄をお見守り下さい」と述べた。

遺族代表の赤田サダさんも、「このように立派な墓苑に納骨されて遺族にとって感激に絶えない」と述べ、「国の行く末と戦没の御霊を思いながら、私たちを残して亡くなりましたあなた方。ここに立つとあなた方の声が聞こえるよう。私たちのこの元気な姿をごらん下さい。あなた方の犠牲のおかげで平和な生活を迎えられます。これからも安らかに眠り、私たちの将来を見守って下さい」と墓に対して呼びかけた。

最後に参列者が一人ひとり菊の花を献花。式場は全く静かで、雨の音と追悼の言葉だけが耳をうつ。厳粛でしめやかな雰囲気に包まれた。遺族の一人は、「夫が小禄付近で戦死した事はわかるのですが、そのあとは…。でも、こんな立派な墓苑にまつられて地下で喜んでいるでしょう」と目頭を押えていた。

1978年（昭和54年）2月26日沖縄タイムス

戦後50年

節目の夏 国を超え 不戦の祈り



「平和の礎」除幕式、碑面に刻まれた肉親らの名前をさがす遺族＝糸満市摩文仁、平和祈念公園

慰霊の日 「平和の礎」を除幕

村山首相ら三権の長が参列

沖縄は終戦から五十回目の夏いで迎えた。二十三日の「慰霊の日」、激戦地・糸満市摩文仁の平和祈念公園では、正午から太平洋戦争・沖縄戦終結五十周年を記念した「平和の礎」の除幕式が太田昌秀知事、遺族ら関係者のほか、村山富市首相や来賓約四千人が参列してしめやかに執り行われた。追悼式に先立ち、午前十時から二十三万余の全戦没者名を刻んだ「平和の礎（いしじ）」を除幕し、永遠の平和を誓った。太田知事は「私たちは世界のどんな人々へ向かっても、決して武器によって平和を語ることのない、平和と共生の島沖縄を築くために努力し、半世紀という歳月を経た平和への思いを新たにした。

4、5、6、7面に関連



追慕の情さらに深く

追悼式 内外から8千人

平和の礎の除幕に先立ち、「沖縄全戦没者追悼式」が行われた。

今年で十五回目となる「沖縄全戦没者追悼式」が、「平和の礎」除幕式典の前日、糸満市摩文仁の平和祈念公園で行われた。

式典には、糸満市内から出席した遺族や県内各市町村代表ら約千人、一般参列者ら約七千人の、合わせて八千人が参列。一九四五年の「沖縄戦」で亡くなった二十三万人余の冥福を祈った。

同一一時過ぎ、式典会場には、糸満市内から出席した遺族や県内各市町村代表ら約千人、一般参列者ら約七千人の、合わせて八千人が参列。一九四五年の「沖縄戦」で亡くなった二十三万人余の冥福を祈った。

まず県民を代表して太田昌秀知事が式辞を述べ、「多くの人類で初めて地上戦を経験した沖縄戦の惨禍を忘れることなく、二度と戦争の悲劇を繰り返さないという誓いを、全世界の人々に向けて発信していくことが、私たちに課せられた責務である」と述べた。

また、村山首相は「二十一世紀を目前にした今日、核兵器の脅威は去ったとはいえ、地球上から戦争の惨禍が絶えたわけではない。戦争体験を次代に語り継ぎ、世界の人々と平和の尊さを分かち合うことが大切だ」と述べた。

3. 遺　骨　収　集

52.2.2 新報

沖縄人の遺骨

四百体

十七日日本から送る

【東京三十一日共同】三十一日開かれた衆院海外同胞引揚特別委員会で吉武恵市厚相は（さきに閣議で決定した遺家族援護については今後も修正するつもりはない）と答えた、またこの日の同委でつぎのことが明らかにされた

△沖縄出身者の遺骨＝遺骨の大部分はすでに六回にわたって沖縄に送っているが二月十七日にはさらに四百体を送る△日本近海の沈船内の遺骨引揚＝近海における沈船の調査はできているが沈船内の遺骨もできるだけ早く引揚げたい、また現在行っている硫黄島の遺骨調査のほかサイパン、ウエーキ、アッツ諸島の遺骨調査も関係方面と行合せたうえで早急に実施する

沖縄に眠る遺骨

日本から調査團派遣か

【東京一日共同】硫黄島の遺骨一ぱい同胞から外務省宛につぎの調査と併行して沖縄でも昨年十月ごろから沖縄仏教会代表の護国寺住職名嘉芳章師が中心となつて日本死人および一般戦没者の遺骨調査を行つているがこの一つた、沖縄の山野には今なお戦死者の遺骨が散乱しその数は一万以上と推定される、これをこのまま放置しておくにしのびず昨秋十月から月一回の割で琉球大学生や高校生の協力を得て収骨運動を始めたが現在のような調子だと何年たつたら完了するか全く見とおしもつかない状態である、今まで収骨したものはもよりの部落の自然の穴を利用し仮納骨所に納めているが将来日本との往来が自由になれば日本から多数の遺族が来訪に来ると思うので各部落にある納骨所を一カ所にまとめて大納骨塔を建立し納骨人の便を計りたいと念願している、また骨内には氏名や部隊名、階級などのわかつている骨が多数あり昨年十二月日本の各市町村長あてに調査の依頼状を出したところ百名以上の氏名がわかつたしかし骨の発掘、火葬、納骨、輸送など相当費用がかかるので大納骨塔建築費とともに日本政府の負担をお願いしたい

1952年（昭和27年）2月2日琉球新報